報道各位

2017 年 4 月 14 日
株式会社インプレスR&D
http://nextpublishing.jp/

熊本地震から 1 年
『被災者と災害ボランティアの共生をめざして
ー熊本地震の現場から被災者のニーズを問い直す』発行

直後から現地調査を行った研究者による書

インプレスグループで電子出版事業を手がける株式会社インプレス R&D は、『被災者と災害ボランティアの共生をめざしてー熊本地震の現場から被災者のニーズを問い直す』（著者：﨑浜 公之）を発行いたしました。

本書は著者が平成28年熊本地震の現地調査を踏まえて執筆した、新しい被災者支援の可能性を提唱する論文を書籍にしたものです。

『被災者と災害ボランティアの共生をめざしてー熊本地震の現場から被災者のニーズを問い直す』
http://nextpublishing.jp/isbn/9784844397687

著者:﨑浜 公之
小売希望価格:電子書籍版 1000 円(税別)／印刷書籍版 1500 円(税別)
電子書籍版フォーマット:EPUB3／Kindle Format8
印刷書籍版仕様:B5 判／モノクロ／本文 160 ページ
ISBN:978-4-8443-9768-7
発行:インプレス R&D

＜＜発行主旨・内容紹介＞＞

本書のもとになる調査は、平成28年熊本地震を事例として扱い、主な調査フィールドとなった熊本県上益城郡益城町では、発災翌日の 4 月 15 日に初めて現地入りした後、継続的に協働的実践及びアクションリサーチを行い、訪問回数は 17 回、活動日数は 64 日となっています。

調査の結果、ニーズには、言語化可能なものと言語化困難なものがあること、被災者と支援者という一義的な関係において発せられるものと生活者同士の対話的な関係において発せられるものがあることがわかりました。

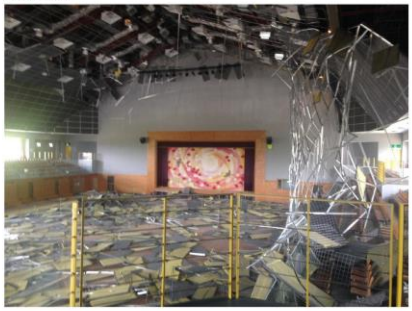
災害時における被災者の「ニーズは聞いたらわかる」というわけではないし、「ニーズは被災者が、もしくは支援者

が一方的に規定する」というわけではないという立場から、ニーズはいかに分類され得るか、そしてそれらに対していかなる被災者支援が求められるかについて、考察しています。

（本書は、次世代出版メソッド「NextPublishing」を使用し、出版されています。）

第５章　エスノグラフィー　天井の落ちたアリーナ

天井の落ちたアリーナ



配布を2人で1枚、ティッシュの箱は1家庭に1箱と配布の制限がかかった。昼食は自衛隊がつくるおにぎりだけだった。「弁当はないのか？」と被災者の方に尋ねられたが、「申し訳ありません。今日は物資が届いておらず、ないんです。自衛隊の方がおにぎりを作ってくださっているので、その配給にお並びください」と応えた。しかし、その自衛隊のおにぎりも、スムーズに作られているわけではなかった。おにぎりを包むラップが不足したため、避難者に対して館内放送で、「ラップをお持ちの方は、至急受け付けまでお持ちください」というアナウンスが流れるほどだった。配給の列は長蛇となり、強い日差しの中、おにぎり二つのために1時間ほど立って待つ状況であった。

YMCAの運営スタッフの体力も限界に近づいていた。物資配給のスタッフの顔ぶれを見ると、前日までと全く変わらないメンバーだった。それに対して、頻発する余震を怖れて、避難者は増える一方だった。運営スタッフは、14日の夜から不眠不休で運営に当たっていた。1度目の地震の避難者の対応に追われた15日だったが、息つく間もなく16日の未明に2度目の地震が発生したため、全く休むことができない状況であった。皆、脂汗で額に髪の毛が張り付くような具合であった。「あたしは48時間動きっぱなしだよ」と、中年の女性スタッフが苦言を漏らされていた。運営スタッフの体力は、もはや限界であった。

私たちは、運営スタッフのヘルプとして物資配給や避難者の対応にあたった。ほとんど、物資の不足を避難者に案内するという、心苦しい現場であった。また、避難者が昼食も満足にと

第５章　エスノグラフィー　花が咲き廃棄されるダイコン

花が咲き廃棄されるダイコン

私は、Aさんの無念に同情したが、「水汲み」の例からも、災害ボラセンの方針や運営を変えることは困難だと判断し、災害ボラセンではないアクターに働きかける方法を模索した。

5.8.3　農協支所長、農政課長との意見交換

私は、災害ボラセンだけではなく、農協や農政課に連携を求めることにした。5月28日、前田さんに事情を説明し、上益城郡農業協同組合益城支所長（以下、農協）の松本さんと、益城町役場農政課長の森本さんとの話し合いが叶った。私たちは、農協益城町支所にて、一時間ほど意見交換をした。

結論から言えば、農業ボランティアについて、農協としても農政課としても、「専門技術が必要だから、素人には頼めない」との認識があるため、農家とボランティアをマッチングするような組織的な動きはできないとの回答だった。ただし、草の根的に直接農家とやりとりしてボランティアを行う分には問題ないということだった。

お二方は、もちろん西原村では農業復興ボランティアセンターが立ち上がっていることを知っていらっしゃったが、農家の負担が逆に増加することを懸念されていた。具体的には、西原村でジャガイモの種をボランティアが植えた後に、農家の方がもう一度「植え直し」をしなければならなかった事例を指摘された。ボランティアが農家にとって足手まといになってしまう可

第５章　エスノグラフィー　ひまわりの鉢に植えられたツユクサ

ひまわりの鉢に植えられたツユクサ

さて、この後日談から、明子さんらが実施した「はるかのひまわりプロジェクト」は、大きな成果を残したのではないかと言える。それは、住民の主体形成という成果である。贈呈したひまわりのプランターを中心に、花や植物を育てるという主体性が、徐々に住民の皆様の中で形成されたのだった。それは、新たな植物を育てようという、住民の皆様の、活力をも引き出したと言える。

このように、積極的に住民の皆様が、お世話に関わってくださる背景には、安永地区が、ひいては益城町が、農業を基盤にした生活を営んできたということも関係しているだろう。住民の方は皆、「何かを育てる」ということが、得意であり、好きなのである。しかし、震災以降、多くの住民の皆様は、何かを育てるということができなくなってしまった。安永地区では、水稲栽培も取り止めになってしまったのだ。仮設団地は、コンクリートと砂利が敷き詰められ、植物を育てることができる環境ではなかった。そこへ、小さなプランターではあったが、植物を育てることのできる環境ができたことで、住民の皆様に「ここで何かを育てたい」という気持ちが芽生えたのである。これは、言い換えれば、住民の皆様とプランターという物との間で、ニーズが創出され、またそれが満たされたということができるだろう。もちろんその背景には、これがただのプランターではなく、それまで木山中学校の卒業生や在校生が育ててきたひまわりを植えていたプランターであるという意味が、うまく安永仮設団地の住民へと伝わったこと

第7章　考察　ニーズの分類

表7-1　ニーズの分類（暫定版2）

	支援現場の集合流	対話的関係の集合流
言語の水準	第1のニーズ （積極的妥当性）	第3のニーズ （消極的非妥当性）
身体の水準	第2のニーズ （消極的妥当性）	第4のニーズ （積極的非妥当性）

以上、本項では、規範理論による考察を、言語の水準と身体の水準という枠組みで、整理を行った。そして「支援現場における集合流」と「対話的関係の集合流」それぞれに、言語の水準と身体の水準があることを説明した。最後に、第6章の暫定的なニーズの分類を一部更新し、第1から第4のニーズの性質を確認した。

7.3.2　理論の接続－ニーズの分類の枠組みの確定

本項では、規範理論と対話論を接続し、さらに、第6章で提示しておいた暫定的なニーズの分類の枠組みを更新する。前項で、表7-1のように、分類の枠組みを更新したが、それぞれのニーズを支援の射程に入れるには、どうすればいいだろうか。

まず、「支援現場の集合流」に内在的な支援をモノロギズム支援と呼び、「対話的関係の集合流」において「支援現場の集合流」に対話的に支援を行うのが、ディアロギズム支援であった。よって、第1、第2のニーズは、モノロギズム支援の射程であり、第3、第4のニーズは、ディアロギズム支援の射程であると言える。

さらに、7.2節で確認したモノロギズム支援とディアロギズム支援のそれぞれの特徴を踏まえると、それぞれのニーズが、いかに応対され得るかについて、次のように整理することができるだろう。すなわち、積極的妥当性を持つ第1のニーズと、消極的妥当性を持つ第2のニーズは、「総括的積極性の関係」において「被災者の言葉」として「信号的再認プロセス」により応対される。また、消極的非妥当性を持つ第3のニーズと積極的非妥当性を持つ第4のニーズは、「対話的能動性の関係」において「関係の言葉」として「記号的了解プロセス」により応対される。よって、下記表のようになる。

表7-2　ニーズの分類（暫定版3）

	モノロギズム支援 （総括的積極性の関係における被災者の言葉の信号的再認プロセス）	ディアロギズム支援 （対話的能動性の関係における関係の言葉の記号的了解プロセス）
言語の水準	第1のニーズ （積極的妥当性）	第2のニーズ （消極的非妥当性）
身体の水準	第2のニーズ （消極的妥当性）	第4のニーズ （積極的非妥当性）

以上、本項では、規範理論と対話論を接続することで、ニーズの分類の枠組みをさらに更新

＜＜目次＞＞

序章 ニーズに関する本研究の基本的なスタンス
第 1 章 問題
第 2 章 理論的枠組み
第 3 章 調査概要
第 4 章 事例紹介
第 5 章 エスノグラフィー
第 6 章 整理・分析
第 7 章 考察
第 8 章 本研究の限界と展望

震災ドキュメントシリーズ
http://nextpublishing.jp/shinsai-document

＜＜著者紹介＞＞

崎浜 公之
1991 年大阪府生まれ。
大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。専門はグループ・ダイナミックス。熊本地震発災後「なんでんかんでんするっ隊」を立ち上げ、大和証券福祉財団の助成を受け支援活動を展開。この活動を基に修士論文を執筆し研究科で最優秀賞を受賞。現在は民間企業に勤務。
研究以外に環境分野で活動。大阪大学環境サークル GECS 代表、NPO 法人エコ・リーグ代表理事、JOIN!未来を変えるごみ拾いプロジェクト代表を務めた。

＜＜販売ストア＞＞

電子書籍:
Amazon Kindle ストア、楽天 kobo イーブックストア、Apple iBookstore、紀伊國屋書店 Kinoppy、Google Play Store、honto 電子書籍ストア、Sony Reader Store、BookLive!、BOOK☆WALKER
印刷書籍:
Amazon.co.jp、三省堂書店オンデマンド、honto ネットストア、楽天ブックス
※ 各ストアでの販売は準備が整いしだい開始されます。
※ 全国の一般書店からもご注文いただけます。

【株式会社インプレス R&D】 http://nextpublishing.jp/
株式会インプレスR&D（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：井芹昌信）は、デジタルファーストの次世代型電子出版プラットフォーム「NextPublishing」を運営する企業です。また自らも、NextPublishing を使った「インターネット白書」の出版など IT 関連メディア事業を展開しています。
※NextPublishing は、インプレス R&D が開発した電子出版プラットフォーム（またはメソッド）の名称です。電子書籍と印刷書籍の同時制作、プリント・オンデマンド（POD）による品切れ解消などの伝統的出版の課題を解決しています。これにより、伝統的出版では経済的に困難な多品種少部数の出版を可能にし、優秀な個人や組織が持つ多様な知の流通を目指しています。

【インプレスグループ】 http://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス(本社：東京都千代田区、代表取締役：唐島夏生、証券コード：東証 1 部 9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」を主要テーマに専門性の高いコンテンツ＋サービスを提供するメディア事業を展開しています。

【お問い合わせ先】
株式会社インプレス R&D NextPublishing センター
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105
TEL 03-6837-4820
電子メール: np-info@impress.co.jp